

金澤八幡宮伝世鉄製経筒他一式

(かねざわはちまんぐうでんせいてつせいきょうづつほかいっしき)

-
- | | |
|----------|---|
| 1. 文化財分類 | 有形文化財（考古資料） |
| 2. 名 称 | 金澤八幡宮伝世鉄製経筒他一式 |
| 3. 員 数 | 一式（鉄製経筒1点・鉄製経筒蓋1点・鉄斧1点・刀子残片） |
| 4. 時 代 | 平安時代末期から鎌倉時代初期 |
| 5. 年 代 | 12世紀～13世紀前半 |
| 6. 作 者 | 不明 |
| 7. 品質・形状 | 鉄製経筒：【品質】鉄鑄製、【形状】細長い筒状、筒全体で腐食による剥落が進む。体部上体にひびが入る体部下半と底部は腐食により割れている。底面には丸い湯口が確認できる。遺存状態は悪い。
鉄製経筒蓋：【品質】鉄鑄製、【形状】山笠状。全体の半分ほど残存する。天井部には丸い湯口が確認できる。遺存状態は悪い。
鉄 斧：【品質】鉄製、【形状】新品で、遺存状態は良い。
刀子残片：【品質】鉄製、【形状】原形を保たず、折れている。残部から4本以上と考えられる。遺存状態は悪い。 |
| 8. 寸法・重量 | 鉄製経筒：【寸法】口径15.4cm・底径12.0cm・器高22.0cm・器厚0.8cm
【重量】経筒体部3,686g・経筒底部 868g 合計4,654g
鉄製経筒蓋：【寸法】口径約20.0cm・器高約5.0cm
【重量】残存1/2で、228.2g
鉄 斧：【寸法】長さ14.8cm・刃先幅5.0cm・柄幅2.8cm・
【重量】431g
刀子残片：【寸法】・【重量】破片のため不明。 |
| 9. 銘 文 等 | いずれも無し。 |
| 10. 伝 来 | |

明治22年(1889)9月に金澤町立石の加藤善松・辰蔵父子によって発掘された。大正9年(1920)に同父子から発掘時の状況を聞いた戎谷亀吉(南山)の記録[横手市郷土史研究会1991]によると、立石集落東方の鳥居長根丘陵のうち「真坂」と呼ばれる山の頂上に立地する「饅頭形を為せる盛土経塚」から経筒が出土した。また、通称「老姥山」の山頂の「経塚様の物」より「古刀剣(刀子)13点と鉄斧1点」として出土した。双方の出土地点の略図も記録されている。

これら2基の経塚については、昭和52年(1977)作成の『秋田県遺跡地図』に「直坂経塚」「老姥山経塚」として掲載されている。しかし、令和4年度に行われた現地踏査では、老姥山経塚は

確認できたものの、直坂経塚は遺跡地図の位置周辺においては確認できなかった。

上記出土品は、明治 34 年（1891）までに金沢八幡神社（現金澤八幡宮）に奉納されたと考えられる。『金澤古蹟図書』所収の明治 34 年付け金沢町役場作成文書には、金沢八幡神社所有として「明治 22 年中に老姥山の古墳より採掘」と伝わる銅製の「駄鈴」（5 寸）※、鉄製の「瓶」（8 寸）及び古刀が掲載される。大正 6 年（1917）刊行の『改訂後三年戦蹟志』では、金澤八幡宮の宝物として「駄鈴」が掲載され、「或いは駄鈴に非ず、（中略）或いは云ふ経筒なり」と解説が付されるが、鉄製の「瓶」の記載はない。大正 9 年作成の前述の戎谷の記録においては「古銅の経筒」を「一名を駄鈴トモ称スタル事アリ」と説明するが、添付された写真図から今回諮問資料の経筒を指すことは間違いない。一方で鉄製の「瓶」については掲載されておらず、大正 6 年以降に「駄鈴」とされた銅製品と今回諮問資料の経筒の混同が起こった可能性が高い。なお、「古銅」と記されているが、質感・強度・錆の具合及び類例等から当該経筒が鉄製である事は確実である。

平成 3 年（1991）からは、後三年の役金沢資料館（現後三年合戦金沢資料館）に寄託されている。「直坂経塚出土品」として鉄製の経筒の体部と底部が一括して保管され、その他は鉄製経筒から剥落した錆片及び鉄製品残部と認識されて同梱されていた。

なお、「直坂／眞坂経塚」の表記については、戎谷亀吉は「眞坂」と記録しており、昭和 42 年（1967）の『秋田県の考古学』では「眞坂経塚」と「正字（略字）」に改められている。しかし、昭和 52 年（1977）の『秋田県史 考古編』では「直坂経塚」、同年の『秋田県遺跡地図』では「直坂（マツツアカ）」と表記された。これ以降、昭和 61 年（1986）年『秋田県遺跡地図（県南版）』と『横手市遺跡詳細分布調査報告書』、平成 19 年（2007）の『横手市史 資料編 考古編』、平成 20 年の『秋田県遺跡地図（県南版）』に至るまで遺跡名として「直坂経塚」を踏襲している。横手市教育委員会では上記の経緯を踏まえ、本資料においても「直坂経塚」を名称として採用するものとする。

※ 駄鈴／驛鈴…古代律令時代の官吏の出張の際に朝廷から支給された鈴のこと。

11. 所在地 横手市金沢中野字根小屋 102 番地 4 後三年合戦金沢資料館

12. 所有者の名称及び住所 宗教法人金澤八幡宮 秋田県横手市金沢字安本館 4 番地

13. 資料の概要

経塚とは、「経典を供養し地下に埋納した場所」の事を指す（立正大学博物館 2016）。古代の経塚は、全国的には 11 世紀後半から 12 世紀末頃まで造営され、埋納品としては紙本経などの経典類、それを納めた経筒類（銅製・石製・陶製・鉄製）と経筒類を保護する甕などの外容器などがあり、副葬品として銅鏡・刀身・合子・銭貨・仏具などが確認されている。

金澤八幡宮鉄製経筒他一式は、鉄製経筒・鉄製経筒の蓋・鉄斧・刀子残片からなる。直坂経塚出土の鉄製経筒には蓋が備え付けられ、経典類が入っていたとみられるが、一度掘り起こされた際には経典が確認されたが、二度目はなかったと記録される。経筒を保護する外容器はなかったとみられ、直接、鉄製の経筒と蓋が埋納されていたとみられる。老姥山経塚出土の鉄斧と刀子残片は副葬品と考えることができ、経筒には伝来記述より瓶（壺）が利用されていたと思われる。経塚の埋葬品としては十分な組み合わせである。

14. 資料価値

経筒類は全国的な例をみると圧倒的に銅製のものが多く、鉄製のものは非常に少ない。これは、鉄製のものは腐食が進み現存する確率も低いことや、壊れても再利用できるため経筒として利用されることは少なかったとみられる。秋田県では鉄製経筒は確認されておらず、東北では、山形県で3事例（東根市光明寺跡経塚・高瀬山経塚・尼ヶ沢土壇遺跡）、福島県で1事例（丹波楯山）のみで、全国的に見ても20事例に満たない貴重なものである（村木 2003）。さらに東北地方において現存するのは東根市の経筒のみとみられる。この中で、直坂経塚は、腐食があるものの鉄製経筒と今回新たに蓋も確認されたことから、非常に貴重な事例といえる。

銅製の経筒は、銅板式（近畿系経筒）と銅鑄式（一鑄式経筒）と分類され、東日本に多いとされる（村木 2003）。本経筒は鉄製であるが、分類としては一鑄式経筒に相当すると考えられる。本経筒の器厚は0.8 cmを測り、銅製のものに比べて厚く作られている。鑄型の注ぎ口である湯口が、鉄製経筒の底面と鉄製経筒蓋の天井部で確認された。湯口は丸型が古く、一文字型が13世紀頃以降に出現するとされる。直坂経塚の湯口は丸型であり、経塚の年代と合致している。

15. その他参考となるべき事項

隣接する尾根の閑居長根経塚出土品は、昭和27年11月1日付けて秋田県指定有形文化財（考古資料）となっている。

番号2	（名称）古鏡蓋付陶製経壺（員数）1個	閑居長根1号経塚
番号4	（名称）銅製経筒（員数）1個	閑居長根2号経塚



① 戎谷南山が1920年に描いた経筒



② 現在の鉄製経筒の状況1(ひび割れ・剥落・腐蝕が進行している。)



④ 現在の鉄製経筒の状況3(内面には鋳型の削り跡がわかりづらい。)



③ 現在の鉄製経筒の状況2(外面には鋳型の削り跡が幾重の線のように見える。)



⑤ 外部底面中央で確認できる丸型湯口。

図2 直坂経塚出土鉄製経塚現況写真1



⑥ 今回の調査により確認した鉄製経筒の蓋。これまで資料館台帳では、鉄製経筒底の一部となっていたが、これとは接合しない。現況は半分ほど残存し、丸い湯口が左側に見える。



⑦ 鉄製経筒の蓋を横から見た様子。天井部から口縁部に至るまで山笠状になっている。口縁端部で屈曲することから、蓋の合わせ口であることが考えられる。



⑧ 同じく今回の調査で確認した鉄斧。『金沢山八幡社神寶図譜』、「八 経塚」『秋田県の考古学』、「経塚」『秋田県史 考古編』秋田県に記録されている。

保存状態は良い。刃こぼれがないことから未使用の可能性が高い。



⑨ 破片として、一袋の塊を整理した様子。鉄製経筒蓋と刀子 1 点などが確認された。



⑩ 同じく別の破片袋を整理した時の様子。刀子 3 点の他、茎の破片が多くある。戎谷亀吉の記録では、老姥山経塚で13点の刀子が出土したとする。

図 3 直坂経塚出土鉄製経塚現況写真 2